



恐山参り

母に会えるのだろうか。誰かに会えるのだろうか。何がそこにあるのだろうか。念願叶っての恐山行き。当日はあいにくの雨でした。いくつものカーブを曲がり、うっそうとした山道を登り、停車したそこには、奪衣婆と懸衣翁が立っていました。そのそばを流れる川を人々は三途の川と呼び、そこにかかる橋を渡れば、あの世と信じています。この辺りから、私の体は不思議な変化(変調)を感じます。なんだか体が重く感じてきて、息苦しくもある不思議な感覚を覚えます。

門をくぐる前に売店に立ち寄りしました。偶然、母や祖父がよく食べていた黒飴とお菓子をみつけ購入しました。門を抜け、辺りに目をやると見渡す限りゴツゴツとしたむき出しの岩肌のグレーの世界。ところどころからガスの煙があがり、この世界は一体どこまで広がり続けているのだろうかと不安にかられます。相変わらず負荷のかかったような体は、一歩一歩進むのも難儀でした。むき出しの岩肌には、おびただしい数の小石が



積み、置かれています。その無数の小石から、大切な人との別れをした人たちがいろいろな想いを抱えながら、恐山のこの場所までやってきて、それぞれの想いをこの地に託し、預けていったことがうかがい知れます。

震災慰霊塔をお参りしました。被災地から遠い恐山の地にも慰霊塔を建立していただいていることに感謝の気持ちでいっぱいになります。極楽浜に着きました。私の大好きな高田松原に似てました。慣れ親しんだあの浜の風景によく似ていました。この場所はまた来たいと切望するほど不思議な場所です。不思議な穏やかさと静けさの広がる場所。私は心の中で母を呼びました。すると、ずっと吹いていた風が私の左後ろで急にぱたっと止まりました。私が体験したのは、それだけです。しかし、きっと母がそこにいたのだと思います。私のそばに来てくれたのだと思います。すごく心地よい空間を離れ、参拝を終えるとひどく消耗している自分がいました。

この感覚にひどく似た経験を2012年3月11日にしました。あの震災から1年が経ったこの日、まだがれきだらけの高田の街に向かい、あの時間を高田で過ごし、家に戻ってきて、体も頭の中も動けなくなってしまった時の感覚にとっても似ていました。

不思議な感覚、奇妙な感覚、それでもまた来たいと思うところ。それが恐山でした。日常を離れ、大切な人との空間を共有できる。そんな場所でした。

(陸前高田市出身 靴屋のゆきのちゃん)



東日本大震災 百物語

第1話～スーパーに居る親子～

2011年3月11日、2時46分。震度6の地震が発生した。何波にも及ぶ津波が、何度も町を襲った……。町は壊滅し、夜中も聞こえる音は、ザーッ、ザーッと町を襲い続ける津波の音だけだった。震災直後、被災地で多くの人たちが避難していた避難所の中で、町の人たちが秘かに話していた1組の親子の話がある。

おおよそ鉄筋だけがむき出しで残るスーパー一階の出入り口を、出たり入ったりするお母さんと、5歳くらいの女の子が手をつないでいる姿が、町の多くの人たちに、目撃されていた。

「買い物中だったのかもしれないね。」「亡くなったことに気が付いていないのかもしれないね。」親子は誰かに迷惑を掛ける訳でもなく、ただそこにいる。町の人たちは幽霊だと言って騒ぐこともなく、その親子をしきりに心配していた。ある日、復興の目的のためにそのスーパーが取り壊されることになった。「あの親子は、どうなるのだろうか？」町の人たちは話し合い、地元の「カミさま(イタコと呼ばれる風習が残る)」に拜んでもらった。スーパーの出入り口に花を手向け、「ここは、もうすぐ取り壊されるよ。」カミ様の言葉を合図に、親子は一本の光に向かい進み出したという。

スーパー取り壊しの数日前から、親子の姿は無くなった。幽霊となり、姿を見せた親子は町の人たちに心を掛けてもらいながら、空の上へと向かったに違いない。今頃、スーパーで買い物をした物で美味しいご飯を作り、安心出来る場で親子は笑顔でご飯を食べていることだろう。幽霊は、自分が姿を見せたい人にだけ、姿を見せるという。親子を目撃した人たちは、きっと、何とかしてくれるかもしれないと思った親子に、選ばれた人たちだったのかもしれない。(陸前高田の話)

被災地では多くの幽霊談がありますが、その話を聞くたびに、自分の家族たちも誰かに姿を見てもらえているのかもしれないと、どこかに居てくれ、存在してくれている。そういう気持ちにさせられます。

(陸前高田市 靴屋のゆきのちゃん)

みんなの知恵袋1～災害の経験から～

いのち新聞では、震災時欲しかったもの、あって良かったものなどを話し合う時間が度々あります。シリーズでご紹介していきます。

停電になったとき〈光・情報〉

当たり前にあるはずの光や情報が寸断されると、とても心細いものでした。人とつながることが温かく感じた時間です。

- ラジオ(替えの電池)
- 懐中電灯(替えの電池)
- 時計
- 携帯電話の充電器(電池式のもの)
- ろうそく
- ライター



※湯飲みやお皿の上にもろうそくを垂らしてしっかり立てます。

「いのち新聞」へのお手紙や活動資金のご寄付ありがとうございます。

お問い合わせ先

〒024-0024 岩手県北上市中野町2丁目28-23
株式会社 桜内 「いのち」新聞編集部
☆お電話での問い合わせはご遠慮ください。ハガキ又はお手紙で受付けています。

ご支援・ご寄付のご案内

北上信用金庫 東支店 口座番号 0103488
預金種類 普通預金 口座名称 いのち新聞 代表 笹原 留似子

ご支援いただけるスポンサーの皆さまには、活動報告を別資料として報告致しております。ハガキや封書にて住所・氏名・電話番号・メッセージなどをご記入いただき、いのち新聞編集部宛に郵送ください。